鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン　四半世紀

▶4◀

若山春夫さん（59）　大会実行委員長

「究極の街おこし」実感

一九八六（昭和六十一）年の第一回大会。現在、大会の実行委員長を務める若山春夫さん（五九）＝海津市海津町＝は、交通誘導のボランティアを務めた。中学、高校時代、陸上部に所属。死力を振り絞る選手を見て「体がうずいた。来年こそは自分も」と強く思った。

だが翌年は、水泳の息継ぎができず出場を断念。三重県桑名市の水泳教室に一年間通った。そのかいもあって、第三回大会に初出場。急な流れと低水温の悪条件の中を泳ぎ切り、バイク、ランとも極限状態でこなした。

第五回大会では選手宣誓を務めた。当時、日本トライアスロン連盟の会長だった元読売ジャイアンツ監督長嶋茂雄さんに「良かったよー」と甲高い声を掛けられて握手。

長良川を背に、トライアスロンへの思いを語る若山春夫さん＝海津市で

「忘れられない。感激した」と振り返る。七回出場してすべて完走し、選手を引退した。

トライアスロンは当時の伊藤光好海津町長の発案で始まった。一般道を使うレースでは交通誘導が大変。ボランティアスタッフは給水などを含め千五百人必要だった。行政の支出にも限界がある。第十六回大会から県トライアスロン連合が運営を引き継いだ。

その前から建設省（当時）の出先機関に赴き、河川敷にトライアスロン用の特設コースの開設を求めた。最初は門前払いが続いた。だが、熱意は次第に伝わり、七年前に河川敷コースでの開催が実現した。

眠れぬ夜もあった。「選手が無事、ゴールできるだろうか」「ボランティアは確保できるのか」「天候は大丈夫か」。そうした中、仲間の存在と選手の笑顔が心の支えだった。

忘れられない記憶がある。子ども対象のわんぱくトライアスロンを初めて開いた約二十年前。閉会式の後、ウナギのつかみ取りを企画した。うれしそうな子どもたちの顔、顔、顔。関東から保護者や祖父母と一緒に来た子もいた。

その光景を見て、「究極の街おこし」と感じた。その思いは今も同じ。頭の中では「どんな風にすれば喜んでもらえるのか」と考え続けている。

「一人では何もできない。でも、みんなの力を合わせれば何とかなる」。トライアスロンが、そう教えてくれた。協力してくれた住民、仲間、国の役人、そして選手やボランティアスタッフの顔が浮かぶ。それらの人たちに感謝の気持ちを込め、今年も真夏の大会に臨む。（松瀬晴行）